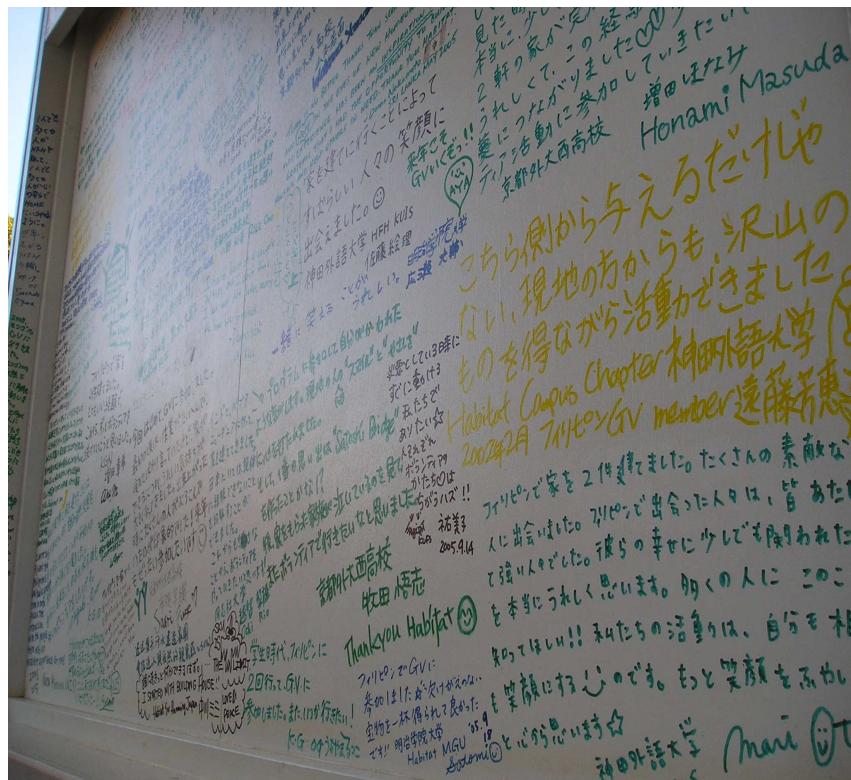


様々な出会いを提供してくれた愛・地球博が終了しました。
ご支援とご協力をありがとうございました。

ハビタットブースの壁にあった寄せ書き



目次

希望を築くということ 1
2005年 愛地球博にて

地球博でのハビタットの
活動に関する統計 2

愛・地球博より～閉幕
は次の始まり～ 2

チャリティ・トライア
スロン 3

国際ボランティア貯金 3
寄付金の配分

GVが残した「家以上の
もの」とは— フィリ
ピンBASECOレポート 4

ハビタット・ハウスか
らの一歩 ～フィリピ
ン、バセコ地区を訪問
して～ 5

GV PLUS レ
ポート (サービス
ラーニングの一環とし
て) 6

津波募金 6

ボランティアボイス 7

スタッフ紹介とお知ら
せ 8

希望を築くということ — 2005年 愛地球博にて

2200万人という愛・地球博の入場者のうち、10万人もの人々がハビタットのブースを訪れ、40万人弱の人々がパンフレットを受け取ってくれました。世界中から多くの著名人が訪れ、万博でのイベントなどを通じて私たちを支援してくれましたが、日本の皇族や橋本龍太郎元首相、横浜市長、Dow JapanのCEOなどの方々も私たちのブースを訪れてくれた方々のひとりです。

ハビタットが万博に出展した目的はふたつあります。ひとつは多くの人に貧困住宅の問題を知ってもらうこと、もうひとつは貧困住宅のない世界を実現するために行動するきっかけを提供することでした。キャンパスチャプターをはじめとする建築ボランティア経験者の皆さんがブースでご自身の経験を他の人々に伝えてくれたことは、この目的の実現に大きな効果があったと思います。

またレンガ作りワークショップ、クリスチャンアカデミーの生徒さんが作ってくれたスリランカの貧困住宅や韓国のハビタットハウスの模型、DVDのプレゼンテーションなども、貧困に対するハビタットの取り組みを紹介するために、大いに貢献したといえます。ブースの成功はDow Chemical, 3M, Costco, LG など多くのスポンサーを始め、学校などの協力団体、そしてボランティアの皆さんのおかげです。本当にありがとうございました。

地球博での185日間がもたらす新たな可能性は無限のようです。ハビタットのスタッフ、ボランティアや世界中の仲間が地球博のために共に働いたことも、まさに「希望を築く」ことだったといえるでしょう。

地球博でのハビタットの活動に関する統計

- ハビタット・フォー・ヒューマニティーの Building Houses Building Hope”について説明を受けた人の数：42,677人
- ハビタットのブースを訪れた人の数：103,035人
- 配られたパンフレットの数：387,567枚
- HFH buildsに興味を持って署名してくれた人の数：500人
- ラジオや新聞記事、テレビなどでの報道や取材：20回
- 作られたレンガの数：13,690個
- アメリカから参加したボランティアの数：230人
(いくつかのチームは万博会場でパフォーマンスを行いました)
- 愛知県から参加したボランティアの数：300人
- 日本のキャンパスチャプターから参加したボランティアの数：100人
- メインスポンサー：ダウケミカル、パッキム日本パプテスト宣教師団、LG電子、コストコ、クリスチャンアカデミー
- サブスポンサー：Force 21, Butterflycorp.com, 3M



「愛・地球博より～閉幕は次の始まり～」 中川ファテラワルク

2005年3月。まだ名古屋では雪の日もあった頃に愛・地球博は開幕しました。暑くじめじめした夏の日々や肌寒い秋の北風が吹く今日まで、私たちの活動を見守ってきた白と青で塗られたハビタットブースはその役目を終えて取り壊されました。そして今私の手元には、大量の写真とスタッフ、ボランティア、そして世界中からの来場者と過ごした日々の思い出が残っています。

ハビタットの出展プロジェクト「ビルディング・ハウジング、ビルディング・ホープ ～家を建てること、希望を築くこと～」は、体験と市民参加をテーマにした愛知万博、瀬戸会場でも数少ない全期間参加でした。ここで、ハビタット建築の模型、建設ボランティア経験者との対話、DVD上映、またレンガ造り体験を通して、多くの人々が私たちの活動に触れることとなりました。そして、そのうち500人もの方々がボランティアとしてハビタットに参加することに興味を示してくれました。

また会場の外でも私たちは、NHKやケーブルテレビ、ラジオにくりかえし出演したり、朝日や読売など国内

大手の新聞にもとりあげられたりもしました。このように、万博のおかげで、これまでボランティアに興味がなかったような方たちにもハビタットの活動を知ってもらうことができたと思います。

閉幕が近づくにつれ、私は会場内に一種の変化が起きていることに気づきました。入場を待つ人の列が日に日に長くなったのです。スタッフの忙しさもピークに達しているにもかかわらず、私たちは一日の終わりには疲労感よりも達成感のほうが強く感じられるようになりました。瀬戸会場では全期間出展によって会場の中核を担ったハビタットだけでなく、会場全体がひとつのパビリオンのように、この6か月で感じたことをメッセージとして未来に伝えようとしているのを感じました。

「ハビタット・フォー・ヒューマニティって日本語で?」「ボランティアって何する人?」「世界にはごみを集めて住む家を作らないといけない人たちがいるのを知っていますか?」私が万博で毎日のように来場者に繰り返して聞いた質問です。しっかり答えの言える人はごくわずかしいませんが、間違っているにもかかわらず何かを言いかけてたり答えを知りたがる人はたくさんいます。このように国際協力やボランティアについて知りたい、関わりたいと思う人々がいる限りハビタット・フォー・ヒューマニティ・ジャパンは存在し働きかけ続ける意義があると思います。万博が終わるということは、また次に新しいことが始まるということです。そして平和のメッセージを伝える役目は、スタッフからそのメッセージを受け取った来場者の皆さんへと移っていつているのを日々感じています。

チャリティ・トライアスロン 中元 ドナ

2005年8月21日、ホープ・インターナショナルとハビタット・フォー・ヒューマニティという二つのNGOの主催で、第1回チャリティ・トライアスロンが名古屋で行われました。このイベントは、結果やタイムを競うのではなくトライアスロン初体験者を対象にしたもので、参加者は初級、中級、上級の3コースから好きなコースを選んで参加しました。

初級コースでは、大会最年少、2人の3歳児たちも無事それぞれの家族とともに初めてのトライアスロンに挑戦し、見事にゴールしました。またプロバスケットボールチーム、「三菱エレクトリック・ドルフィンズ」のスーパースター、ウォルター・ブラウン・マツシマがゲスト参加してくれたことで、このイベントは企業や万博関係者にも幅広く支持される結果となりました。そしてこのイベントが成功を収めたのは、勇気ある参加者をはじめ協力的なスタッフのおかげであり、この場をお借りして感謝申し上げます。

31kmの上級コースに初参加した女性はこう話しています。「ゴール前の歓声と応援の拍手が今でも聞こえてくるようです。31kmの上級コースはプロレベルの短距離トライアスロンに匹敵するもので完走には大変な精神力が必要でしたが、実際にやってみるというスリルと恵まれない人々の助けになっているという自覚が一緒になって、忘れられない思い出になりました。来年も必ず参加します!」

ホープ・インターナショナルとハビタット・フォー・ヒューマニティ共同開催の第1回チャリティ・トライアスロンについての詳しい情報をお求めの方は下記のアドレスにご連絡ください。ホープ・インターナショナル：www.hope-international.jp
ハビタット・フォー・ヒューマニティ・ジャパン：www.habitatjp.org。



国際ボランティア貯金寄付金の配分

国際ボランティア貯金は、郵便局の通常貯金や通常貯蓄貯金の受取利子を、開発途上地域の人々の福祉の向上のために寄附する貯金です。

郵政公社は、平成17年度に約8600万円を53団体に配分することにしましたが、ハビタット・フォー・ヒューマニティ・ジャパンが配分を受ける団体の一つに選ばれました。「大火被災住民のための住居の建設及びコミュニティー運営指導 [フィリピン]」事業の家屋資材費に対し、1,075千円の配分を受ける予定です。

マニラ市の埋立地の通称BASECO地区には約6,000戸の貧しい人々が住んでおり、マニラの貧困地区として知られているのですが、2004年1月に大火があり、2,000戸以上が焼失しました。現在、フィリピンのハビタットオフィスや他の団体が住居建築に取り組んでいますが、支援が不足しており、日本からもGVチームに来年の2月と3月に行って頂こうという計画です。

事務局スタッフはすでに現地調査を2回行っていますが、国際ボランティア貯金に加入して下さった方々の願いも込めて、この地域の再建に寄与したいと思います。

GVが残した「家以上のもの」とはー フィリピンBASECOレポート 三村紀美子(HFHジャパン 業務マネージャー/プログラムコーディネーター)

ハビタットは貧困住宅をなくすために、それぞれの国の事情に合った活動をおこなっています。日本では国内で住宅建設をおこなってはいませんが、代わりにグローバル・ビレッジ・プログラム（GV）を提供し、アジアのいろいろな国で多くの方にボランティアとして活躍してもらっています。

GVを担当している私はトレーニングと調査の機会を利用し、短期間ですが立命館チームに混じってフィリピンのBASECOというアフィリエイトに行ってきました。これまでスタッフが大学生のチームに同行する機会はありませんでしたが、本当に楽しかったですし、貧困に対する彼らの純粋で真剣な思いには、心を打たれました。

さてBASECOには毎年日本からいくつかのチームが訪れています。そこでコミュニティの人々や現地のコーディネーターに、彼らの活動がどう受けとめられているのか聞いてみました。とても評価が高かったことを、ここでお伝えしておきます。コミュニティのことを気遣ってくれること、子供たちの面倒をよくみってくれること、文句を言わずに勤勉に働いてくれること、チームワークがよく、仲良く仕事をしていることなどが多く出された意見です。

BASECOの人たちは、日本から来るGVチームが一生懸命バイトをして貯めたお金を自分たちのために使っていること、強い日差しの中、見返りを求めずに働いてくれていることをとても感謝していました。それがコミュニティに変化をもたらしているように思います。

例えば半年前にはなかった街路樹が植えられていて、それぞれ担当の木に水をあげています。庭にも野菜や花が植えられていて、高校生や大学生のグループが壁に絵を書いたりしています。

またBASECOでは、他の人たちのために何かしたいという芽があちこちで出ています。女性の現金収入を増やすために手工芸を教えているグループもありますし、失業中の人々が仕事に就けるようにコンピュータの使い方を教えてあげたいという大学生もいました。これはGVの存在によるところが大きいと思います。GVチームはただ寄付をして、労働力を提供して去るだけの存在ではないということです。確実に「家以上のもの」を残しています。

BASECOのような貧しいコミュニティの中にも貧富の差は歴然としてありますが、GVチームの影響を受けた人たちが、自分たちより恵まれていない人々を助けていくようになれば、貧困も少しずつ軽減されていくようになるのかもしれませんが。そしていつかBASECOが自分たちより恵まれていないコミュニティを助けるようになってほしいと思います。

GVチームの善意が何倍にもなって引き継がれていくように、日本側とフィリピン側のコーディネーターで協力していく必要性を強く感じました。また日本側のコーディネーターとしても、GVに参加して下さった皆さんに「家以上のもの」が残るようにしていかなければならないと感じました。

なおHFHフィリピンのホームページのOur Stories というコーナー(http://www.habitat.org.ph/our_stories.php)にBASECOの人々の記事が載っていますので、よろしければご覧ください。またHFHフィリピンではホームページの改良を進めているということです。そのうちGVに参加された皆さんが関わったコミュニティのニュースなども分かるようになるのではないかと期待しています。



「ハビタット・ハウスからの一歩 ～フィリピン、バセコ地区を訪問 して～」

HFHジャパン
プログラムコーディネーター
中川ファテラワルク

帰国後一週間を過ぎててもまだ心に残っていることのひとつは、ある立命館大学の学生と交わした会話です。まるで目の前の光景が現実のものであることを確認するかのように彼は私に聞いてきました。「この人たちは一生このゴミでできた土地に住むんでしょうか?」と。

フィリピンの首都マニラの繁栄や喧騒の裏手、マニラ湾の一角に作られた埋立地にできたバセコ地区は、私の視界がとどく限り、道路も家もゴミで作られた街です。しかしハビタットの建設チームが乗ったバスがその地区の奥へと進むと、突然周囲とはまったく異なった景色が現れます。明るい色に塗られた壁と区画整備された通路。ハビタットハウスのあるコミュニティです。そんな家の間から人々が微笑みかけたり手を振ってくれたり、中にはバスを追いかけてくる子供たちもいて、内心ほっとしました。ここでハビタットは歓迎されていると思ったからです。

バスから降りると、地元の調整員やアフィリエイトが昔はとても危険な地域だったことや、ハビタットが来て変わったこと、そして人々が幸せに感じていることなど地域の説明をしてくれました。



そんななか学生のうち何人かと私はハビタットハウスの裏側を見ようと、ほんの数歩だけ奥へと進むと、築一年の新しいハビタットハウスの裏手には、またおびただしい数の貧困住宅が連なっていました。そして、それはまるで立て替えられるのをじっと待っているようにも見えました。バセコでは8軒の家が連なった1棟建てるのにたった一週間しかかかりません。それでも、単純に計算した私は唖然としました。この状態にいつか終わりが来ることなんてあるのだろうか?

いつか、この人たちも他のハビタット・コミュニティの人たちのように自分たちの手で家を建てそれぞれの人生を歩み始めるはずです。私たちハビタットはそのきっかけを作るに過ぎず、ハビタットの建てる家はホームオーナーたちが新しい人生を歩みはじめるための踏み石になるべきだと思います。ですから、ここで問われるべき質問は「どうやってハビタットハウス、またこのバセコ地区から外の世界へ出て行くか」です。扉を開けて外へ出るからこそ貧困の解決につながるのであって、社会から回避するために家の中やハビタット・コミュニティに閉じこもるようになっては、スラム街はずっとスラム街のままになるでしょう。家が、安定した仕事や教育を受けることにつながり自立につながるというのがハビタットの目指すところです。今回のフィリピン訪問で私は、一度は疑問を抱きつつも確信しました。ハビタットの貧困に対する戦いはきっと厳しく永いものになる、しかしきっといつか終わりがくる、と。

GV PLUS レポート (サービスラーニングの一環として)

2005年8月17日から26日まで明治学院大学宗教部主催フィリピンワークキャンプとして4回目のGVプラスが実施されました。このプログラムは教養教育学部の授業の一環として位置づけされており、参加者はハビタットのGVプログラム終了後に報告書を提出し、単位習得となります。

GV活動を行ったマニラ市内バセコ地区での住居建築は大火災被災者のためのマニラ市からハビタットフォーヒューマニティフィリピンオフィスへの委託事業となっている関係で、何月何日？にマニラ市長表敬訪問を行いました。そして、8月18日から日曜日をはさんで8月23日までの5日間、バセコサイトで住居建築ボランティア活動に励み、その後の2日間は、バナイ地区へ移動しホームステイ体験をしました。8月24日はマニラ市パヤタス地区というスモークマウンテン（ゴミ山）においてSALT ファウンデーションというNGOの元で行動しました。SALTは子供達のための食糧配給や奨学金プログラムを運営している団体です。ここでGV PLUSの参加者達はSALTファウンデーションの活動紹介とパヤタス地区の子供達のなどのオリエンテーションを受けた後カシグラハン地区にあるダイケアセンターで地区の母親達のクロスステッチ作業の手伝いをしました。ハビタットワークサイトでのホームオーナーと現地ハビタットスタッフとのワーク、SALTファウンデーションでの活動と、短い滞在期間のプログラムでしたが、引率のGVPLUSチームリーダー森田 恭光教授から次のような評価を頂いています。

「フィリピンのハビタットスタッフの方には、大変よく面倒を見ていただき感謝いたします。学生も、いい体験ができ喜んでいました。教育効果も十分得られました。ワークサイトのバセコ及びホームステイ先のバナイのかたがたにも大変お世話になり、かつ、親切に対応していただきました。」

(文責：高柳)

津波募金へのご協力ありがとうございました

昨年12月26日、インド洋沿岸の地域を津波が襲いました。13カ国でおよそ20万人もの人々が亡くなり、さらに500万人が家を失いました。下の写真はハビタットが25,000軒の住宅をつくるために努力している様子と、日本でのキャンペーンの様子をそれぞれ写したものです。

多くの方のご協力により、ハビタットジャパンは4,833,598円もの募金を集めることができました。Habitat for Humanity Internationalから、救援資金を最も必要としているスリランカに送金してほしいという要請がきましたので、9月末までに442万円をスリランカのハビタットオフィスにお送りしました。振込手数料1万5千円も含めて40万円を事務所の経費とさせて頂きました。この場をお借りまして深くお礼を申し上げます。



リッキー・マーティンもタイで建築ボランティアとして働いてくれました



ペットボトルキャンペーン
(100軒ものレストランやバーにご協力いただきました)



オフィスボランティアとして働くということ

神田外語大学ハビタットKUISのメンバーである私は、夏休みから10月までジャパンオフィスでボランティアとして働きました。大学1年時にキャンパスチャプター（CC）メンバーになって以来3年半、通常の活動の他に、フィリピンとスリランカにて2週間ずつGVに参加し、マイアミ留学中にもハビタットマイアミ支部でボランティア活動に従事するなどしていましたが、その経験を通してハビタットジャパンオフィスのサポートの大切さを強く感じていました。

オフィスボランティアとしては1週間に2回、ホームページや書類を翻訳、パンフレットのコピー、ファイリング、愛知万博のフォローアップチームに参加するといった仕事を手伝いました。また最近では10月1・2日に日比谷公園で開かれたグローバルフェスタのハビタットブース出展も経験しました。ハビタットジャパンは今後とも様々な分野で活動を広めていく予定なので、今後ますますオフィスボランティアの必要性が高まりと思います。ボランティアをしてみても実感したのは、ハビタットジャパンオフィスのサポートなしにはGVを成功させることは難しいということです。オフィスとのよい関係がとても大切であり、オフィスボランティアとは縁の下力持ちであるオフィスの仕事を知るよい機会だと思っています。またオフィスにとってもCCからのボランティアは良い関係を築ききっかけとなり、よりよいサポートに繋がると思います。

来年は青年海外協力隊18年度1次隊村落開発普及員としてウガンダへ派遣される予定です。

神田外語大Habitat for Humanity KUIS矢野 真澄



Volunteer Voice !!

ハビタットのオフィスで過ごしたわたしの夏

元々は留学しているイギリスの大学でインターンをやりたかった私でしたが、オファーも少ない上に、競争も激しく、夏の予定も無いまま日本に帰国してしまいました。突然「ハビタットのオフィスでボランティアをしよう」と思いついた私ですが、とんとん拍子に話がすすみ、オフィスボランティアとして働くことになりました。

オフィスに入って最初に気付くことは、スタッフの数でした。かならず一人はオフィスにいますが、最高で六人・・・とても少ない。六人でどうやって物事をまわしているのか、不思議でした。でも人数が少ないと他のスタッフと知り合うのが早いので、嬉しかったです。そして自分がハビタットのために手助けができたということで、わたしの夏は意義のあるものになりました。

一番感謝していることは、いきなりオフィスに転がり込んできたわたしを暖かく受け入れてくれ、レギュラーのスタッフのように接してくれたことです。ミーティングに参加して意見も述べることもできましたし、自分から働きかけて物事に影響を与えていけることに感動しました。

スタッフの皆さんは心の強い人たちばかりでした。人手が少ない上、予想外の問題が次々に起こるのに、また新しい企画を始める気力があるからです。逆に私が勇気や元気を貰いました。

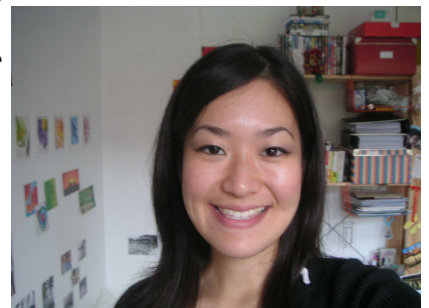
正直言ってイライラすることもありましたが、オフィスの皆がどれだけ大変な毎日を送っているかを分かったら、イライラも収まりました。

本当に、HFHジャパンが無ければ、GVも色々な募金活動も成り立たないと思います。

本当にお疲れ様です&ありがとうございました！

これからも応援してます☆

英国ノッティンガム大学 後藤 杏子



年末のご挨拶にかえて。

ハビタット・フォー・ヒューマニティ・ジャパン、ニュースレターの編集部よりこの場を借りて、年末のご挨拶をさせていただきます。2005年も万博出展や津波支援など様々な活動をしてきました。会員の皆様のサポートのおかげで、それぞれから学んだ事柄を来年への課題として一年を無事に終えることができます。オフィスに新しくスタッフが加わったこともあり、来年もハビタットのさらなる発展を目指して活動していきたいとスタッフ一同やる気に燃えています。引き続き倍旧のご厚情を賜りたく、お願い申し上げます。

ハビタット・ジャパンに新しいスタッフが加わりました。よろしくお願いいたします



三村 紀美子
業務マネージャー



中川ファテラワルク(ミミ)
ボランティアコーディネーター



タム順子
GVコーディネーター

ハビタット・オリジナルカレンダー

ホームページなどでお馴染みの「子どもたちの夢の絵」をモチーフにした2006年用卓上カレンダーです。ハビタットを通じて新しい家を手に入れた家族の子どもたちが描いた絵が、12枚の絵ハガキになるように作られています。ご興味をもってくださった方はHFHジャパンまでご連絡ください。手前味噌ですが、とてもよく出来ています。



オフィスボランティアを大募集！

ハビタットの活動を広く日本国内そしてアジアへ広げていくためのHFHジャパンへの支援活動の参加者が必要です。データ入力、発想、編集、PCサポート、イベントなどの活動であなたの力を発揮してみませんか！？

アンケートのお願い

ハビタットオフィスは新しいプログラムの開拓やオフィス運営の合理化、広報の強化など来年の活動に向けて準備を進めています。さらに当団体を支えてくださっている会員の皆様とよりよい関係を築いていくことも、ハビタットの重要な仕事のひとつです。そこで、次回からのニュースレターに盛り込む内容にリクエストなどがございましたら、是非ご連絡いただきたいと思います。このような会員の皆様との交流やご鞭撻は、ハビタットのスタッフが活動の更なる発展を目指す原動力となります

特定非営利活動法人
ハビタット・フォー・ヒューマニティ・ジャパン
〒164-0003
東京都中野区東中野1-45-5 日ノ出ビルB101
Tel : (03) 5330-5571 Fax : (03) 5330-5572
URL: www.habitatjp.org